

6-4					
主題	北欧海外研修パーソン・センタード・ケアの学びより 環境づくりで眠っていた強みを知る				
副題	スマイルブックから得た入居者の笑顔と介護職員の目的意識の在り方				
キーワード 1	ケアの質の向上	キーワード 2	笑顔	研究(実践)期間	3ヶ月

法人名・事業所名	社福) 東京栄和会 なぎさ和楽苑				
発表者(職種)	相澤学郎(ユニットリーダー)、井川和也(ユニットサブリーダー)				
共同研究(実践)者	畑井輝樹(介護課長)、田中恵(介護係長)、岡田季子(ユニットリーダー)				

電話	03-3675-1201	FAX	03-3675-1203		
----	--------------	-----	--------------	--	--

事業所紹介	昭和40年23区内初めての特養として足立区に開設。都市整備のため昭和55年に江戸川区の土地の無償提供を受け移転。平成17年4月にユニットケアを取り入れた施設へ立て替えを行う。地域と共に歩む施設を目指し続け、年間5000名のボランティア活動の実績を誇る。平成27年より毎年、北欧海外研修(デンマーク・スウェーデン)に参加する。				
-------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--	--	--	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

北欧海外研修のパーソン・センタード・ケア研修から法人の共通理念、意識、目標を職員が理解すること、アプローチが異なっても目指す先は皆が同じ方向性に向かうべくケアの考え方を学んだ。ケアプランを基にユニットケアを行うも介護職員間での考え方の違いやケアを行う上での違いをいかに共通認識として同じ方向を目指していけるのか、パーソン・センタード・ケア研修の学びを活かす取り組みを考えた。入居者の方を価値のある全人格的な存在として社会参加しながら生活したいと願う存在としての高齢者観を尊重し、その人の視点や立場に立って理解しその人を知ることがテーマに掲げた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

入居者の重度化に伴い入居者同士の会話が減り日中も傾眠、失禁、夜間浅眠の方を対象に、パーソン・センタード・ケアの手法を取り入れることで、対象者の方の「強み」「弱み」「心地よい時間」「笑顔の時間」、これまでの生活以上にその人物像を「知る」「気づき」を得るためのツールとして「スマイルブック」なる記録書式から基礎情報を掘り下げた。スマイルブックの情報からユニット職員全体の声掛けやケアのアプローチのスキルアップにつなげることと、日中の関りから対象者の夜間の睡眠時間との関係性の把握、残存機能の活用と活性化に期待して取り組んだ。

《3. 具体的な取り組みの内容》

対象者 W・T様

平成23年9月20日入所 昭和44年12月15日生まれ(89歳)要介護3

疾患 認知症、左大腿部頸部骨折術後後遺症

ADL 移動:車椅子足こぎ自操(体重増加、下肢浮腫)入浴:個浴 着脱:声掛け自立

食事：常食常菜自立 排泄：紙パンツ半介助 性格：親しみやすい、協動的、社会的
取り組み期間 平成31年3月1日～令和元年6月14日
取り組み手段 ①笑顔の瞬間を記録する ②笑顔・心地よい時間を情報共有する ③食事用お
盆拭きの役割 ④話し相手との交流の場を設ける ⑤車椅子自操で運動量を
増やす ⑥就寝パジャマ更衣を促す

取り組み職員数 ユニット介護職員13名

地域ボランティアの協力で毎週水曜日・土曜日のボランティア喫茶に参加し、麻雀、歌声喫茶、おしゃべりを楽しむ。役割や楽しみが少ない夕方の居眠りを回避するため、職員も同行しやすい16:00前後の時間にお隣のユニットまで自操しご近所さん同土ランプゲームや五目並べ、おしゃべりの時間を設ける。残存機能の活用では就寝時のパジャマ更衣の声掛けを再徹底した。

《4. 取り組みの結果》

・6月1日～6月14日までの期間、④話し相手との交流の場の取り組みでは14日間で7回お隣のユニットに出向くことができた。1回約20分の交流時間であるが行先の曲がり角のポイントで「この人形見たことがあるわ」と覚えている。帰る時には笑顔で「楽しかった」「また行ってもいいわよ」との声が聞かれた。夜間浅眠の理由として日中の活動量を見直すと同時に、交流の場に参加できた日の7日中の3日間は夜間は眠れていた。

・パジャマ更衣促しの声掛けでは残存機能を活かすと同時に自力更衣を行う事で「夜」である時間軸や「寝る時間」の認識につながっている。

・介護職員アンケートの結果、11名の介護員より交流中の状況や戻ってきた時の表情が笑顔で楽しそうであり、自ユニットの生活でも表情が明るくなったとの結果が出た。

《5. 考察、まとめ》

「スマイルブック」の情報から改めて入居者同士・ご家族・ボランティア、人との関わりの中から会話を通じておしゃべりしている時の笑顔が強みであることを改めて再認識した。ユニットを超えた交流が日常生活の刺激となり夜間の穏やかさや睡眠との関りにも関連していることが分かり、ユニットを超えた介護職員同士の連携の重要性を再確認できた。環境を整えることで本来持っている強みを生かされること、個々の介護職員の声掛けやアプローチの課題も再確認した。アンケートには介護職員の自己満足ではないかとの意見もあり、パーソン・センタード・ケア研修の学びである目的意識をいかに皆が同じ方向で目指せるのか、今回の取り組みでは本来の強みの効果と介護職員間の課題を得ることができ、この積み重ねがケアの質の向上につながると考える。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

認知症の看護・介護に役立つよくわかるパーソン・センタード・ケア 鈴木みずえ監修

《8. 提案と発信》

介護職はチームケアである。個々の思いや介護観の違い、人間性のエッセンスを如何に専門性を高めるための共通理解と共通目標につなげられるか、介護職員が笑顔で接すると入居者の方も自然と笑顔になる。「笑顔」の強みから生まれる効果をケアの質の向上として発信していきたい。